2016 年7月 30 日(土) 第 11 回「聖書で読み解く映画カフェ」上映作品

「普通の人々　」の見どころ

ORDINARY PEOPLE　1980 年製作　124 分

2016 年 7 月 30 日(土)

「普通の人々」 Ordinary People

(1980 年製作　アメリカ映画　上映時間 124 分)

上映前の見どころ

●第 53 回(1980 年)のアカデミー作品賞、監督賞(ロバート・レッドフォード)、助演男優賞(ティモシー・ハットン。これが主役なら、間違いなく主演賞)、脚色賞(アルヴィン・サージェント)の 4 部門を獲得した。原作は1976年の Judith Guest の同名作。

俳優としてのロバート・レッドフォードはまだアカデミー賞の演技賞を手に入れていない(アカデミー名誉賞は受賞している)が、演出家としてはこの処女作で作品賞、監督賞を獲得した。

●カメラワーク:　若い頃は画家志望だったレッドフォードは移りゆく季節感や中西部の町を美しくとらえることにもみずみずしい感性を示した。

●音楽:　物語を慰撫するかのように優しく包み込むJ・パッヘルベル「カノン」の穏やかな旋律。(冒頭、続くコーラス、そしてエンディングにも。)

ストーリー

●平凡で安定した生活を過ごしていたある一家が長男の死をきっかけに崩壊していく様を描く。

シカゴ郊外の住宅地に一戸建ての家をもつジャレット家は弁護士の父親カルヴィン(ドナルド・サザランド)を中心に平凡だが幸福な生活を営んでいた。しかしある日、湖で、秀才でスポーツ万能だった長男バックと高校の聖歌隊員で17歳の弟コンラッド(ティモシー・ハットン)のボートが嵐で転覆、バックは溺れ死んだ。助かったコンラッドもその後自殺未遂を起こし、精神病院に入院することとなった。

それから4か月後、コンラッドは退院して再び学校に通い出すが、何も解決されたわけではなかった。彼に対してどこか冷たい母親ベス(メアリー・タイラー・ムーア)とは心を開いて話すことが出来ず、父親にも頼ることができずにいた。息子を心配する父はコンラッドを精神分析医バーガー(ジャド・ハーシュ)のもとに通わせることにした。通いだした当初は心を閉ざしていたコンラッドだったが、次第にその胸のうちを打ちあけるようになる。

同じように病院に通っていたカレン(ダイナ・マノフ)と会うが、演劇部の部長をしていて今は通っていないという。コンラッドは水泳部を辞めるが、それを他人から聞いた母親は恥をかかせられたように責める。一方、カルヴィンは、コンラッドとベスの間のわだかまりを解きほぐそうと必死の努力を試み苦悩する。聖歌隊の合唱仲間ジーニン(エリザベス・マクガヴァン)に声を褒められたコンラッドは、明るい気分に浸り、彼女とボウリングでデートして、リストカットを見つけられる。

精神科医に一度通ったことのある父親は母親に皆で通おうと提案するが受け入れられず、クリスマスに二人はゴルフをしにヒューストンに。クリスマス休暇に入り、カレンにお祝いの電話を入れたコンラッドは、彼女が自殺していたことを聞き茫然とする。取り乱したコンラッドに、バーガーは医者の立場から言葉をかけ、コンラッドを苦しめている罪の意識から解放させる。落ちつきを取り戻した彼はジーニンを訪れ、好きだと告げた。ある晩居間にいた父母の元にコンラッドが現れ、初めて自分から進んでベスにキスをした。

しかし、ベスは抱き返すことなくそのままの姿勢でじっとするだけだった。夜中に目を覚ましたベスは、階下の部屋で 1 人泣いているカルヴィンの姿を見て当惑する。彼は妻に初めて君への愛があるのか分からないと本心を告げた。明け方、彼女は家を出て行く。庭で 1 人立ちつくすカルヴィンのもとにコンラッドが近づき、2 人は無言のままいつまでも抱き合うのだった。

上映後の見どころ

●かつての米国映画は、郊外の高級住宅街に立派な邸宅を構える WASP(White Anglo Saxon Protestant)の上流中産家庭を理想的に描いたものだが、今やその家庭は機能不全で崩壊している。

●当時のアメリカはレーガン登場前のなんとなく元気のない時代。内省的な作品が注目されたのだろう。

●家族の断絶と崩壊から再生へ可能性を描いた人間ドラマ。

似たようなテーマの映画:

・「スタンド・バイ・ミー」(1986)のゴーディーが年の離れた兄デニーを事故で亡くし、その影響で両親からも冷遇され、トラウマになっている。

・「アメリカン・ビューティー」(1999)

・「ある愛の風景」(デンマーク映画)と「マイ・ブラザー」(そのアメリカ版)も同じような兄の喪失を描いている。

●聖書の人物: イサクとリベカの夫婦。長男エサウを愛する父イサクと、次男ヤコブを愛する母リベカの葛藤。

●この映画の主要家族は 3 人。シカゴの弁護士夫婦とその次男。

①次男:兄の死に責任を感じ、自殺まで企て、鬱病になってしまう、繊細で感受性豊かな青年。

②母親: 長男を亡くして以降、自分の殻に閉じこもって周りへの配慮がなくなってしまい、冷淡で他人と強調できない女性。

③父親: そんな息子や妻への慮りや、気遣いから、真実から目をそらし、表面的な穏やかさを求める気の弱い男性。

この映画が語りかけるもの

(1)多くの家庭は、“普通の人々”で成り立つが、決して“普通”ではありえない。

・平穏で何事もないように見えた家族の日常生活

・愛情と信頼によって固く結ばれていたはずの一家

・このように表面は“普通”を装っていた家庭が、ちょっとしたきっかけで(この映画では長男の死)激しく揺り動かされ、目に見えない緊張が家の中を支配していく。3人がそれぞれの苦悩を抱えて、次第に噛み合わない歯車のような関係に陥っていく。

(2)人間の心を病ませる3つの潜在要素:

①罪責感: 次男コンラッドの心を支配し、自殺未遂をしても逃れられなかった、「自分が兄を殺した」という悔悟の思い。

②孤独感: 「自分は親に(特に母に)受け入れられていない」という寂寥感。(「エデンの東」で父に拒否され続けた次男キャルの思いに通じる。)

③怒り:愛する自慢の息子だった長男バックを見殺しにした次男コンラッドへの、母親の“赦せない”という潜在的憎悪感。押し隠された憎悪は、“拒否”となって表れる。

(3)人の心の重荷を真に解放してくれるもの=“脱出の道”:

＊(Ⅰコリント 10:13) 「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」

＊この”脱出の道”は、しばしばある人の存在によって備えられる。コンラッドに備えられた人は、精神科医バーガーの存在。

＊「精神分析医」は、人間関係が複雑化し、多くの人の心が病みだした戦後アメリカの花形職業（映画にも、実に多くの精神科医が登場。「幸せのレシピ」も。一見どこも悪くなさそうな人も、訪れる。）しかし、どんな名医も、深く病んだコンラッドを医学セオリーどおりの単なる心理学療法では癒やすことはできない。

＊コンラッドが、カレンの自殺の知らせを電話で聴き、パニックになり、それをきっかけに長い間彼の心を苦しめてきた兄と二人のヨットでの遭難のトラウマが、どっと押し寄せて自分では気持ちの収拾がつかなくなり、深夜、彼のもとに駆け込んだ時のバーガーの精神科医としての対応は見事。彼が初めて心を解放できたのは、バーガーの「私は君の友だ」のひと言。（×「私は君の主治医だ」＝医者対患者）→「僕はこの人に、100 パーセント受け入れられた！」

(4) 自分自身が変わるとき、周りの全てが変わる:

＊彼の父母は、ある意味、“変われない人々”だった。

父: “変化（変わること）を恐れる”人。妻と共に、なんとか変わろうと努力し、自分たちもバーガーのセラピーを受けようと提案するが、妻に厳しく拒絶され、彼女への愛にさえ自信を持てなくなる。→そして、妻への愛の不安を告白し、彼女を去らせてしまう。

母:“変わりたくない”人。プライドが高く、自分は正しいのだから、変わる必要はない。そんな自分の中に勝手に入り込んでくる人は、夫でも息子でも反射的に拒んでしまう。

＊あるいは彼女は、息子以上に弱い人だったのかもしれない。彼女の“拒否”は、心のどこかで必死に求めていた“愛”の裏返しだったかも。しかしその弱さを素直に認めず、“強さ”でカバーしようとする限り、真の心の平安は訪れず、自分から去っていくしかない。

＊息子コンラッド: ”変わりたい人”。そしてついに変えられた！

その変化は、心の穏やかさ、表情の明るさすぐに表れる。そして態度にも――。

①恋人ジーニンの家を自ら訪ねて、わだかまりを回復。

②母への“抱擁”。以前の彼には、想像もできない“受容力”と愛の表現。

③父への“抱擁”。ラストでの、妻に去られ、息子へのそれまでの関わり方を激しく後悔し、男泣きになく彼に、コンラッドからの「愛している」のひと言。

(5) 結び　回復への可能性:

●長男バックの死以来、両親の心労の種だったコンラッドが、心の重荷から解放されることによって、今度は両親の絶望を救う“光”の存在になった！

●このお方ありてこそ:　人は、悩み、苦しみ、罪の全てを抱えたままの自分を丸ごと受け入れてくれる人に出会うとき、初めてその人のもとに自分の心の重荷を下ろせる。

・コンラッドは、バーガー医師の「君は私の友だ」のひと言で、長い間の罪責感の呪縛から解放された。

・私たちには、このお方、まことの友なるイエス・キリストがおられる。聖書で彼は、私たち一人一人にこう語りかけておられる。

（マタイ 11:28）「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（ヨハネ 15:13,15）「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。…わたしはあなたがたを友と呼びました。」

●変化を恐るるなかれ:

私たちも、このお方に在って、変わることができる。主に在るキリスト者の変化は、弱さが強さに変わるのではなく、弱さのままで、内より強くしていただけるのだ。

（Ⅱコリント 12:10）「私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

×周りの人を変えようとしている限り、なんの変化も訪れない。悪しき状況はそのまま。

○まず自分が変わること。そこから全てが変わっていく。その力は、主からのみ来る。

「主よ、私を変えてください」と祈れ。主の”奇跡”は、そこから始まるのだ。